教育ネットワークセンター年報, 2016, 16, 123-125（報告｜大学院生プロジェクト型研究）

大学院生プロジェクト型研究・研究成果報告書

研究代表者：齋藤 貴弘（教育設計評価コース）

■研究題目

高等学校における定期テストの品質向上に関する研究

■研究代表者・分担者 氏名

齋藤 貴弘（教育設計評価コース）（研究代表者）

■研究成果概要（目的、実施内容、結果、今後の課題など）

1　目的

「定期テストの成績は良いのだが，実力テストの成績は悪くなる」という生徒・保護者の実際の相談事に対し，高校生 520 人の追跡調査を実施した。調査により，定期テストと実力テストで成績が乖離する現象が実証でき，定期テストと実力テストの少なくとも一方で，適正に学力が測れているのかという疑念が生じた。このことについて，両テストの「ねらい」が異なることに理由を求めることもできるが，英語の定期テストと実力テストでは，ともに英語の学力を測っており，たとえ「ねらい」が異なっていたとしても，成績が乖離するには「ねらいの違い」以外にも何か原因があると考えるのが自然である。そこで，本研究では，定期テストで学習者が育成しようとしている学力の構造と要求されている学力の構造を定期テスト観，学習動機，学習方略を用いて明らかにすることと，テスト作成者（教員）のテスト前支援行動と作問方略を確立し，相互の関係性を明らかにすることで，定期テストと実力テストで成績が乖離する現象の原因を解明し，現状の定期テストへの理解を深め，今後の改善への示唆を得ることを目的とする。

2　実施内容

(1)　定期テスト観，学習動機，学習方略に関する研究の動向調査

定期テスト観，学習動機，学習方略について，それぞれ，定義の方法とその内容，および，それぞれの関係性ついてについて先行研究を概観し，整理することで，特に，高校生を対象とした定期テストおよび学習に関する研究の現状を把握した。

(2)　生徒用質問紙調査の実施

東北地方の進学希望者が多い普通科高校 9 校を対象に，質問紙調査を実施した。質問

紙調査の内容は，定期テスト観，学習動機，学習方略について，5件法により回答を求めた。また，成績に関する自己評価と学力観について3件法にて回答を求めた。

(3)　教員用質問紙調査の実施

生徒用質問紙調査を実施した高校9校を対象に，質問紙調査を実施した。質問紙調査の内容は，テスト前支援行動と作問方略について5件法により回答を求めた。また，所属校における定期テストの課題等を自由記述により回答を求めた。

(4)　質問紙調査の分析

生徒用質問紙調査と教員用質問紙調査により得られた回答について，SPSS Statistics および SPSS Amos により分析を試みた。

3　結果

(1)　定期テスト観，学習動機，学習方略について，定期テスト観に関する先行研究は少なく，肯定的なテスト観と否定的なテスト観が得られていた。学習動機と学習方略については，対象となる先行研究も多かったが，統一見解は得られていない。つまり，研究毎にそれぞれで定義付けされており，使用する文言も統一されておらず，学習観が学習動機や学習方略として用いられているものも散見された。

(2)　生徒用質問紙調査は，平成27年9月15日から平成27年10月13日の間に実施された。実施状況は下表のとおりとなった。

学年	対象者数（A）	回収数（B）	有効回答数（C）	回収率（B/A）	有効回答率（C/A）
全体	719	702	675	97.6%	93.9%
1	358	350	335	97.8%	93.6%
2	361	352	340	97.5%	94.2%

(3)　教員用質問紙調査も，生徒用質問紙調査と同様に，平成27年9月15日から平成27年10月13日の間に実施され，実施状況は下表のとおりとなった。なお，調査対象者は，各校，国語，英語，数学の全教員（校長，教頭，常勤講師は除く）とした。

対象者数（A）	回収数（B）	有効回答数（C）	回収率（B/A）	有効回答率（C/A）
236	230	223	97.5%	94.5%

(4)　生徒用質問紙調査の分析の結果，学習者の定期テスト観として「活用型テスト観」と「結果型テスト観」，学習動機として「内容志向動機」と「結果志向動機」，学習方略

として「習得化方略」と「適応化方略」が得られ，定期テスト観と学習動機，学習方略のすべてで「テスト結果を重視する尺度」と「学力育成を志向する尺度」の 2 因子構造が得られた。これらを用いて，共分散構造分析によるパス解析を行い，学習者が定期テストで育成しようとしている学力と要求されている学力の構造を検討した。その結果，学習者が定期テストで育成しようとしている学力と要求されている学力の構造が異なることが示された。

教員用質問紙調査の分析の結果，テスト作成者のテスト前支援行動は，テスト対策を促す「適応支援行動」の 1 因子構造となり，作問方略は，テスト対策が適合する「適応援助方略」とテスト対策が適合しない「学力育成方略」の 2 因子構造が得られた。また，作問方略の下位尺度得点を用いたクラスタ分析では，教員を「バランス重視群」,「生徒重視群」,「学力重視群」の 3 群に分類することができた。教員用質問紙調査の定期テストに関する自由記述で得られた回答は,「担当者間」,「職場環境」,「生徒・塾」,「テストの内容」,「採点・評価」,「授業等教育活動」の 6 グループに分けることができ，それぞれが，教育現場の定期テストの課題を表していた。

4　今後の課題

高等学校の現場では，現行学習指導要領の下，言語活動の充実が求められ，アクティブ・ラーニング等，多様な学習活動が導入されている。一方で，総括的な学習評価としての成績の算出には，従来通り，定期テストが中心であり，多様な学習評価と総括的な学習評価のつながりが希薄である。文部科学省の高大接続システム改革会議では，高等学校教育の改革の一つとして，多面的な評価の推進が検討されており，そこでは，学習評価の改善も求められる。そのような時代にあって，従来の定期テストを中心とした学習評価の在り方を変革する必要があり，同時に，本研究で明らかとなった，学習者が欲求する定期テストの学力形成構造はテストへの適応が中心であることが明確である。このことからも，定期テストの構造も変革が必要となる。これらのことから，今後は，定期テストの具体的な改善の方法を示すと共に，アクティブ・ラーニング等の学習活動の評価の実態を把握し，総括的な学習評価への算入の是非も含めて検討していくことが求められる。